

日本地衣学会

No.38

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	会員通信.....	131
	森をみて地球を考える カナダ プリティッシュ・コロンビア大学研 修記 その4 / 南 佳典.....	131
	「地衣類の分類（上級コース）」奮闘中（千葉県立中央博物館） / 原田 浩.....	134

会員通信 From Members

森をみて地球を考える

- カナダ プリティッシュ・コロンビア大学研修記 - その4

雨がちな天候が続くカナダ西海岸の冬。この時期に入ると、何とも憂鬱な気持ちになってくる。それは、雨がちなことさることもさるながら、12月終わりの冬至に向けて日一日と昼間の時間が短くなるからである。もちろん、同じ北半球に位置する日本でも同じ現象が起きているわけであるが、より高緯度に位置するバンクーバーではそれが顕著になる。夏だと夜の9時や10時まで明るく外で活動できたのに、冬になると夕方5時には暗くなってしまふ。9月から大学に通い始めた新入生達は、10月が終わる頃から元気がなくなってくるという話もあるくらいで、5月病ならぬ、10月病である。しかし、すべてが憂鬱になるというわけではない。10月の終わりにはハロウィンがあったり、12月に入ればクリスマスシーズンになり、町の至る所でイルミネーションが鮮やかに飾られる。特にダウンタウンの飾り付けは見事で、長い夜を華やかに彩っている。カナダのクリスマスは、本場らしくニワトリの数倍もある大きなシチメンチョウの丸焼きが各家庭で必ず出される。クリスマスパーティもいろんなところで開かれ、職場の同僚や友達同士、もちろん親族を招いてのホームパーティも盛んに行わ

れる。学校も2~3週間のクリスマス休暇に入り、多くの学生達が親元に帰るようだ。クリスマスパーティにいくつか招待されたが、きれいに飾り付けされたツリーを眺めながら、お祈りを捧げご馳走をいただくという、ヨーロッパの影響が色濃いカナダらしい時間を過ごさせてもらうことができた。

このように、夜の長い冬にはそれなりの過ごし方があるものである。しかし、雨がちな天候だけはいただけない。それならばもっと天候の良い地域に行ってしまうということで、カリフォルニアまで足を伸ばしてみた。ここには、北米太平洋岸に広がる温帯降雨林の南端部が分布し、それより南には“Chaparral”と呼ばれる疎林が広がる。やや乾燥する地域にも、樹木の枝に着生する地衣類が見られた。残念ながら標本を採取する時間がなかったため種名は不明だが、Brodo et al. (2001) の“Lichens of North America”によると、*Ramalina menziesii* などのようである。種組成も貧弱であるとは限らず、数種が着生しているようであった。

UBC はバンクーバー周辺にいくつかの演習林を所有している。そのうちの一つに、Malcolm Knapp Research

Forest (MKRF) がある。そこには、いわゆる“Mossy Forest”と呼べるような森があり、巨木の枝から着生植物が垂れ下がっている。それは地衣類よりも蘚苔類の場合が多いのであるが、二次林とはいえ自然度が高い良い状態で維持されているなど感じたものである。MKRFでは森林伐採が溪畔林生態系にどのような影響を及ぼすかについて、生物学的あるいは物理・化学的な手法を用いて大がかりな調査プロジェクトが動いている。その中で、今回私は樹木の枝から垂れ下がる蘚苔類を指標植物として数年間モニタリングする提案をし、本調査プロジェクトに加わることができた。この6月には実際に50%程度の間伐が行われるようで、その後の動態が楽しみである。樹幹にはその他地衣類も着生しており、今後は樹幹着生地衣類の動態にも目を向けてみる必要があるだろう。2000年に出版された“The Bryologist, 103: 353-356”の中で、Oregon州立大学のB. McCune教授が地衣類の生育量や組成で森林の健全性を指標するという興味深いエッセイを公表している。森林を構成する樹木ばかり見ていると森林の健全性を正しく評価することはできない。それよりも環境の変化により敏感に反

応する地衣類などは、非常によい指標生物となる。このアイデアを活かし、上述のプロジェクトに新たなテーマとして加えることを提案してみようかと懸念中である。

Douglas-fir という針葉樹が優占する森林の林床下には、Dragon Cladonia (*Cladonia squamosa* ウロコハナゴケ)などの地衣類を含むコケ型林床が広がる場所がある(図1)。そこは上層林冠にギャップが形成されているところで、コケ型林床は格好の苗床となりそうである。一般に、このDouglas-firという樹種は母樹の傘下に子供達がほとんど見られないという更新特性を持つ。樹木の太さを一定の階級に分けて各階級ごとの個体数を棒グラフにしたものを直径階分布と呼んでいるが、そのグラフを見ると見事に実生・稚樹がいなかったことがわかる。しかし、林冠にギャップが開いた場所ではDouglas-firの子供達が何とか生育しているのが見られ、健気な姿に調査の疲れも忘れようというものである。しかしオープンなところでは草食獣の食害が出ることが多く、ここでも新芽をかじられた痕跡が見られている。さて、そこでDragon Cladoniaである。これらの地衣類の存在は、樹木実生更新に対してポジティブかネガティ



図1. ギャップ林冠下の地衣類・蘚苔類群落。

ブか？そういった研究に関する文献は少ないながら（単に私の勉強不足かもしれないので、ご存じの方はご一報くださると助かります）、双方の研究論文が存在する。つまり、実生生育に対して何らかの役に立っているとする立場と、抑制する働きがあるとする立場である（これには地衣成分が関係しているという説がある）。大変興味深いことであり、今後進めていこうと思っている研究テーマである。

3月に入ると、雨が降り続く日も徐々に少なくなり、たまに青空も見られるようになってくる。昨年、バンクーバーに降り立ったとき同様に、これから快適な気候が始まるという矢先、残念ながら帰国の準備に追われる毎日となった。そんな中で、調査から得られた標本の同定を進めた。UBC には世界的に有名な W. Schofield 名誉教授がおられる。現在でも UBC の植物学科内に研究室をお持ちになり、アラスカやアリューシャン列島の調査研究に精力的に携わっておられる。教授は蘚苔類学者として大変高名な方であるが、地衣類にも明るいということである（吉村会長談）。カナダ西海岸での調査を進めるに当たって、非常に心強い方が身近におられたので、分類がおぼつかない私にとって大変ありがたい存在であった。



図2．Douglas-fir の巨木に着生する地衣類・*Sphaerophorus*（サンゴゴケ属）だろうか？

光陰矢のごとし。まさにそんな感じで過ぎ去った一年であった。しかし、この一年間でこれ以上ないような経験ができた。この経験を活かし、今後の研究を展開して行くべくさらなる努力をしていこうと思う次第である。

（南 佳典：玉川大学）

「地衣類の分類（上級コース）」奮闘中（千葉県立中央博物館）

千葉県立中央博物館では、昨年度に引き続き、植物学講座の連続講座として「地衣類の分類（上級コース）」を開催している。4月から9月まで毎月1回づつの開講で、参加者は12名。それぞれがテーマを決め、自ら収

集した標本相手に、実体顕微鏡を覗き図鑑と見比べ、格闘をしている（図1）。

（原田 浩：千葉県立中央博物館）



図1. 講座の一コマ。2004年5月23日。

Lichenology 日本地衣学会ニュースレター
とも、投稿先は：

原田 浩：〒260-8682千葉県中央区青葉町955-2
千葉県立中央博物館。Fax 043-266-2481。
E-mail: h.hrd3@mc.pref.chiba.jp

（原田浩：編集委員長）

複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌31号110ページに。

Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication,

you or your organization must obtain permission. For details, see no. 31, p. 110 of this publication.

日本地衣学会ニュースレター 38号

発行日：2004年 5月31日

編集：原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄

発行者・発行所：日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内

©2004 日本地衣学会 (©2004 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複写等は固くお断りいたします。